

# Report レポート

(一財)北海道開発協会「北海道における地域コミュニティに関する調査研究」レポート⑤

## 郡上市和良町にみる 移住者の真摯な実践が 周囲に及ぼす効果 (後編)



林 琢也 (はやし たくや)

北海道大学大学院文学研究院 准教授

青森県生まれ。筑波大学大学院博士課程生命環境科学研究科修了、博士(理学)。首都大学東京(特任助教)、岐阜大学(助教・准教授)を経て、2019年4月から現職。専門は農村地理学、経済地理学、観光学、地域づくり論。著書に『役に立つ地理学』(共編、2012年、古今書院)、『長良ぶどう発達史』(編著、2013年、長良ぶどう部会・記念誌出版実行委員会)など。

北海道では、過疎化や家族形態の多様化などを背景に、地域コミュニティによる共助の取り組みやセーフティネットの役割が増してきています。当協会では、地域課題の解決に向けた支援方策の提言に向けて「北海道における地域コミュニティに関する調査研究」に着手しました。

研究会では、構成メンバーであるそれぞれの委員がこれまで行ってきた調査研究の成果等をもとに議論を深めています。これらの内容を委員からの報告を中心に皆様にお届けします。

### 1 前編の振り返りと今号(後編)の目的

前号では、岐阜県郡上市和良町のIターン就農者(AM氏)を例に、自らの望む生き方の追求と真摯な姿勢に注目し、配偶者や懇意にしている地域住民、他の移住者との関わりや、周囲の住民に与える意識や行動の一端を考察した。AM氏の農業に向き合う誠実な態度と成果が伝わっていく中で、周囲の理解や協力が

増し、田舎で農業をしながら暮らしたいという移住者(AM氏)を支える社会環境が強化されていく様子が見て取れた。また、移住者との交流が住民(C氏)に地域の魅力を再認識させる効果をもたらし<sup>\*1</sup>、地元の若者や子どもに田舎の良さを語るという行動の動機付けとなっていることが明らかとなった。

後編となる本稿では、AM氏と妻のAF氏の相互補完関係に注目し、調査協力者への複数回に及ぶ半構造化インタビュー(2018年8月~2024年6月)によって収集した情報や資料・データをもとに、移住における配偶者の役割や存在について考察することを目的とする。

### 2 移住の先輩、人付き合いに長けた配偶者

AF氏(30歳代女性)は自宅で鍼灸<sup>しんきゅう</sup>マッサージの治療院を営む。岐阜県飛騨市古川町の出身で高校卒業後、愛知県稲沢市に住み専門学校で学び、21歳の時に鍼灸の資格を取得した。その後は帰郷したものの上京し、1年ほど働き、23歳の春にUターンした。そして山小屋を経営する会社で働いていた時に、その会社が岐阜県のグリーンツーリズム事業の委託を受けており、その関係で参加した研修で、和良町の地域づくり団体「和良おこし協議会<sup>\*2</sup>(以下、協議会と称する)」の事務局長を務めるF氏と知り合ったという。その後は介護施設でマッサージの仕事に就き、勤務先の下呂市内に暮らしていたが、翌年の冬に実家へ戻った。積雪期の飛騨市から勤務先(下呂市)までの自動車通勤をどうしようかと思っていた際に、F氏から下呂市に隣接する和良町内の最初の家を紹介してもらい、移住することとなった(2016年12月)<sup>\*3</sup>。こうした経緯もあり、移住直後から協議会のメンバーとなって、多くのイベントにも積極的に関わってきた。このため、F氏もイベントで人手が必要な時は、“移住者”というよりも1人の協議会メンバーとして、町内出身のメンバーと同じような感じで声をかける間柄にある。F氏は、AF氏について、人と仲良くなるのが得意で、集落の祭りや協議会の活動に加え、町内の「和良虫を守る会<sup>\*4</sup>」の活動や地域のテニスクラブ(ナイターテニス)に参加することで仲間が増えていったと語っている。また、田舎で暮らす上でのAF氏の素養については、以下のよう

F氏：(AF氏は実家のある) 飛騨が好きで、古川、古川ってよく言ってるし、友達も物凄く多いので、いろんな情報をもってる。古川は和良に比べると街だけど、コミュニティとか、人付き合いが大切にされているところで、地域の繋がりがみいたいなものを（小さい時から）体験してきてるから（和良でも上手く適応している）。わらおこし（協議会の拠点施設）にも、何かあるごとに報告にも来てくれるし。

この点について、AF氏自身も実家と和良の違いと共通点を以下のように語っている。

AF氏：自分の実家は、徒歩10分以内くらいのところにコンビニもあるし、駅もあって、結構近くにも何でもあっていう感じだったので…。和良は、そう考えると、限界集落に近いような感じで。でもそういうところに何か1回住んでみたいなあというのがある。ただ、ここまでどっぷり浸かるとは思っていなかったけど(笑)。近所の人との付き合い方は、(和良も実家も) 変わらない。回覧板とかも普通にあったし。だから結構、そこまで（ギャップは無い）。そんなに悩むというか、小っちゃい頃からいろんな人と近所付き合いしてきた環境にあったんで、自分は、そこら辺は全然すんなり入っていったのかなって思います。うちは旦那が結構、都会の人で、コミュニティの作り方の感覚が（違った）。あの人は、他の人に迷惑かけずに、自分のことは自分でできればという感じが強かったけど、ある程度、集落の近所付き合いができないといけないと思うので。田舎暮らしって人付き合いなんだよってところを最初の頃は言ったかなあ<sup>※5</sup>。

また、2022年4月に岐阜市から和良町へ転入した後輩移住者のGF氏（30歳代女性）を夫のトマト農園のパート（2024年6月～）に勧誘したのもAF氏である。GF氏への聞き取りによれば、AF氏と一緒に遊びに出かけたり、県外に遠出をしたこともあるという。AF氏は、コミュニケーション能力の高さも相俟って、移住者同士や、住民と移住者、地域外の有志を繋ぐ橋渡し役やムードメーカーとなっている。AF氏は、協議会の存在について以下のように語っている。

AF氏：私は和良おこし（協議会）があったから今の家も前の家も住めているので<sup>※6</sup>、そこは先ずは感謝しかありませんね。ここ（自宅の一室）で鍼灸院をやる前は“わらおこし”をお借りして、和良の人とかを呼んでマッサージを月に2回ほどさせてもらっていたので、有難かったですね。ああいうフリースペース的な場所って田舎だとなかなか無いので。

協議会の活動やイベントに参加・協力しているモチベーションについては、移住者としての自分を客観的に見てくれたり、いろいろな考え方や価値観の存在を感じさせてくれたりすることを挙げている。

AF氏：（協議会のメンバーでいるのは）みんなで楽しく、ゆるくやるっていう感じで、けっこう楽しいのと、こういう考えもあるんだなって、視野が広がることもあるんで。日常（の中）で見落とししていることに気付いたりもするし。

さらに、同じく協議会のメンバーとなっている移住者との付き合いについては、一例として、以下のよう

AF氏：Dさん（和良町へ移住後にパン屋を開店）が同じくらいに移住していて、年もわりかし近かったので、Dさんの奥さん（DF氏）と仲良くしたりとか、Dさんの繋がりで（パン屋のお客さんが）、うちに患者として来てくれたりとかっていうこともありましたね<sup>※7</sup>。もちろん、移住者同士で会ったり、お互いの悩みとかを話したりもします。

その他にも、DF氏には、冠婚葬祭等の地域のルールや慣習的なことについて聞いたり、起業の先輩として質問したりすることもある。身近な移住仲間との交流は、移住後の悩みの相談や共有、ちょっとした疑問を解決する上でも重要である。

### 3 田舎暮らしにおける配偶者の存在

単身で移住し、人間関係の構築に動んでいた頃と比較して、AF氏は、夫がいることを心強く感じている。

AF氏:(最初に暮らした集落) Yの時は、<sup>かぐら</sup>神楽 (の練習) を見においでよって誘われて行っていました。月1で顔を出して、練習の後とかに飲む機会が多くて。私も飲む方だったので楽しくやりましたが、コミュニケーションをとって集落の人と仲良くなることに必死でしたね。

AF氏によると、周囲は彼女のコミュニケーション能力の高さを評価してくれるものの、移住当初は、自分で何とかしなければという意識が強かったという。その部分は結婚して夫が傍にいることで、1人で背負い込まなくても良くなり、気持ちが楽になったとのことである。同様にAM氏も配偶者が身近にいることの有難さをAF氏と同様に感じるとともに、縁のない土地で農業を始める際の精神的な支えとして、様々な状況で助けになったと語っている。例えば、AM氏は新規就農において大変だったことの1つに農地の確保を挙げている。幸い、研修先の親方農家(BM氏)が農業委員で、当時、町内で空いていた農地の地主を知っていたことで、交渉役も担ってくれたため、AM氏が独力で言うよりもスムーズに農地を借りることができたという。ただし、この時も妻の存在が大きな意味もっていたと感じている。

AM氏:田舎だと、(まだまだ)移住する時に单身よりも家族の方が(地元の方の)信用を得られやすいんだなあというのを先ず感じましたね。とくに農業やるにしても、(家族がいることで仕事として)ちゃんとやっていくんだらうなって目で見てくれたし、畑も借りやすくなりました。周りからの目としてそういうのはありましたね。

この発話は、農地の取得に際しての、当時の状況や雰囲気を含めて語ってもらったものであり、筆者も調査協力者も、移住において、特定の世帯構成や年齢・性別、思想・信条、価値観等によって、有利不利や歓迎度合いが変わることを容認するものでないことは明記しておくが、地元の住民の仲介がある場合でも、見ず知らずの人に土地を貸したりするには、单身よりも家族を伴った移住の方が、感覚的に信用を得やすいという側面は、少なからず存在するといえる。

また、現在暮らすS集落の自治会活動は内容によって世帯内で分担しており、このことは以下の語りから伺える。

AM氏:地域の草刈りは重労働なんで、基本、僕が出ます。職業柄、慣れてるんで、僕出るよって(妻には言います)。草刈りだけじゃなくて公民館の掃除だとか、そういうのは逆に行ってもらってますけど。(各世帯の)当番制になってて、自治会の決まりなんですかね。月1回でまわっていて、年2回くらい行く感じ。向かい(の家)のHさんと一緒に。

A夫妻は、トマト農家として日々、農業に勤しむAM氏(新規就農者)と、農作業や販売のサポート、道の駅でのパートもしつつ、鍼灸治療院を営むAF氏(移住起業家)が、それぞれ別の仕事に従事している。AF氏は、夫の仕事について以下のように語っている。

AF氏:あんまり干渉はしてないと思う。やりたいようにさせてるかな。私になんやかんや言ったところで、たぶん彼は(やり方が)変わるような感じではないので。信念が凄いしっかりしてるから。本当に何か職人気質な感じなので。あとは、(肉体労働なので、間食用の)食べ物ぐらいかな。とりあえず口にできるもの、お菓子とかを置いといたり。おやつとかは置いておくと、けっこう勝手に持って行くので。そこら辺くらいで、何かこれっていうのをホントしてないですよ(笑)。逆に鍼灸院の仕事に対しても、とくに言われるようなことは無いですね。

AM氏もAF氏の仕事のことについては、口を挟むことなく、相互に相手のやり方を尊重していることがわかる。AF氏自身、町内外の様々な地域活動やイベントに参加したり、自ら企画したりすることができるのは、それを許容してくれる夫のおかげであると感謝している。また、以前に体調を崩した際にも、夫が自分の心に寄り添ってくれたと語っている。

このように、社会的で次々と人脈を広げていくAF氏と、農業に誠実に向き合い成果を出すAM氏が互いの個性を活かし、補い合いながら好影響を及ぼし合っていることをAM氏のトマト農園でアルバイトをする

地元の住民C氏（前号で紹介、60歳代男性）も、非常にバランスが良いと評している。

C氏：面白いですね。あそこは。馬が合うんですね。2人が上手くマッチしてる。

#### 4 おわりに

本号では、A夫妻の相互補完関係に注目し、農村移住における配偶者の役割や存在についてみてきた。互いの長を上手く活かし、尊重しながら、田舎暮らしを一層充実したものにしていく姿は、縁の無い土地へ移住する都市住民の参考になる部分や応用できる側面も多いといえる。また、先行研究でもコミュニティとの接点が多いほど、移住者のなりわいづくりにプラスに働くことが指摘されており（図司 2019）、住民も移住者と交わる中で、多くの刺激を「学び」や「発見」としてポジティブに受容することが可能になるとされている。前編も含め、今回まとめた内容は、農村移住に関する1つの事例ではあるが、特定の移住者／世帯に注目し、その行動や意識、周囲との関係を“自ら望む生き方の追求と真摯な姿勢”や“夫婦の相互補完関係”といった要素に分けて精緻な調査を重ねることは、それぞれの移住者の実践や働きかけが転入先の農村での自己実現や暮らしの満足度の向上にどのように寄与するのか、そして、付き合いのある住民や所属するコミュニティにどういった影響を与えていくのかを相対化することに繋がるといえる。そして、その蓄積は現場レベルの実践や活動を支える「小さな理論」を構築すること、人々の頻繁な移動や往来が容易で流動性の高い現代農村におけるコミュニティのあり方を洞察することに貢献すると考える。

#### 謝辞

本稿の作成にあたり、和良町の移住者をはじめとする住民の皆様のご協力を得た。記して厚く御礼申し上げる。現地調査に際しては、北海道ガス株式会社の2022年度大学研究支援制度「移住者の暮らしの満足度の向上と地域社会に果たす役割に関する研究」（研究代表者：林 琢也）の支援金の一部を使用した。

#### 注

- ※1 小田切（2009）は、都市農村交流の力について、交流活動は、地元の人々が地域の価値を都市住民の目を通じて見つめ直す効果をもっているとし、都市住民が「鏡」となり、農山村の「宝」を写し出すことを「都市農村交流の鏡効果」と称している。これは移住者と住民の交流にも当てはまるといえ、場合によっては、農山村で実際に暮らすという決断や行動を起こした移住者の方が、観光客よりも説得力を増すケースもあるといえる。
- ※2 和良おこし協議会は「みんなで楽しく集落づくり」をスローガンに町内15集落の地域づくり活動を支援してきた。また、田んぼオーナー制度・ファームトラスト制度（遊休農地対策）や地域資源（鮎やホテル、オオサンショウウオ等）を活かした体験型ツーリズムの企画等を実施してきた。そして2015年度より力を入れてきたのが移住促進事業である。担当のF氏（50歳代男性）は、地域の新たな担い手となり、地域づくりの推進力を高めてくれる移住者をトータルでサポートするコンシェルジュ役を担っている。
- ※3 前編で説明しているが、AF氏は2019年にAM氏と結婚し、現在は町内の別の集落に2人で暮らしている。
- ※4 自然環境の豊かな和良町では、生活空間に近隣接した場所でゲンジボタルやヒメボタルを鑑賞することができる。町外からも多くの人々が車で来訪するため、車のライトによるホテルへの悪影響（光害）や駐車場の問題（無断駐車・違法駐車）等への懸念もあり、2017年に町民有志によって組織されたのが「和良蛍を守る会」である。鑑賞マナーの啓発や蛍の発生状況の調査・SNSによる発信、勉強会の開催、鑑賞期間中のボランティアスタッフによる案内や駐車場の誘導など、蛍を守り続けていく活動を地域全体で行っている。
- ※5 この点についてF氏も、以下のように語っている。  
F氏：A家の場合、AFちゃんは田舎の仕組みみたいなものがよくわかっているんですけど、AMくんは都会の人なんで、たぶん、AFちゃんが促して、これ行かなあかんよとか言ってる時もあるんだと思う。
- ※6 協議会は町内の空き家を、家主の同意・協力の下で預かり、移住希望者に仲介する取り組みを行っており（黒川ほか 2019）、A夫妻が暮らす家も協議会が紹介した物件である。
- ※7 AF氏は鍼灸治療院を営む傍ら、2022年から「道の駅 和良」でパートもしているが、ここで働くことになったのは、鍼灸治療院に通っていた住民から誘われたことが“きっかけ”であった。その意味では、鍼灸治療院自体が彼女の新しい縁を形成する出会いの場にもなっている。

#### 【参考文献】

- 小田切徳美 2009.『農山村再生—「限界集落」問題を越えて—』岩波書店.
- 黒川真由・河合美歩・本木彩未・藤井真奈美・中西一矢・橋本実紅・細川 瞬・林 琢也 2019. 郡上市和良町における移住者と地域住民の交流に伴う意識の変化—共生社会を考える—。地域生活学研究 10: 22-37.
- 図司直也著、筒井一伸監修 2019.『就村からなりわい就農へ—田園回帰時代の新規就農アプローチ—』筑波書房.